佐治順子

学 位 の 種 類 博士(教育学)

学位記番号 教博第65号

学位授与年月日 平成 16 年 3 月 25 日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科 (博士課程後期3年の課程)

総合教育科学専攻

学位論文題目 痴呆性高齢者の音楽療法に関する基礎的研究

論文審查委員 (主查)

教 授 菅井 邦明 教 授 細川 徹

教 授 川住 隆一

教 授 上埜 高志

論文内容の要旨

本論文は、1998年より5年間、継続的に実施してきた痴呆性高齢者に対する音楽療法について行動的および生理的指標を通して実証的に検討したものである。さらに筆者の長年における音楽療法の実践からみいだされた「固有テンポ」が、対象者との相互の人間的コミュニケーションを確立する上で重要であり、「固有テンポ」を用いた音楽療法が痴呆性高齢者に有効であることの検証を試みたものである。論文の構成は以下の通りである。

序論第1章では、研究の課題と目的、および論文構成の概略を述べた。1990年代以降、日本においても非言語的コミュニケーションの一手段としての音楽療法が注目されてきた。しかし医学、音楽学、心理学、教育学などの隣接した学問領域と複雑に関連し、条件の規定と行動の変容が多様であることから、音楽療法に関する実証的な研究は進展していない状況であった。また、筆者が長年の音楽療法の実践からみいだした、すべての人間がもつ「固有テンポ」という新しい時間軸を応用した音楽療法が有効であることを提唱した。

第 I 部第 2 章および第 3 章では、本研究のテーマである「痴呆性高齢者の音楽療法における基礎的研究」の背景となる 2 つのことについて述べた。その一つは第 2 章における本研究に関する文献研究であり、もう一つは第 3 章における音楽療法で使用される楽曲に関する研究である。痴

呆性高齢者を含む健常者約 1363 名からの「音楽の意識調査」を集計し、世代別音楽ジャンル嗜好度を把握した。次にこの調査から得られた高嗜好度の楽曲に関する音楽の数理的構造を分析した。第 2 章で得られた基礎的知見は第 Ⅱ 部第 4 章の脳波測定による生理的研究における聴取楽曲を選択する上で、さらに第Ⅲ部第 5 章および第Ⅳ部第 6 章の音楽療法の評価研究を効果的に進める上でも活用できるものであった。

第Ⅱ部第4章では、筆者の行った継続的な音楽療法のセッションに参加した痴呆性高齢者の中から、楽曲の聴取時および聴取後の脳波測定を行い、痴呆性高齢者に対する音楽療法の効果に関して生理的指標を分析した。被験者は重度痴呆性高齢者(7名)と中軽度痴呆性高齢者(7名)である。聴取楽曲は、これまでの音楽療法のセッションで最も反応の良好であった民謡「斎太郎節」、童謡「夕やけこやけ」、唱歌「荒城の月」を、同じく音楽療法のセッションで計測した各個人の「固有テンポ」と非固有テンポの2種類で提示した。その結果、重度痴呆性高齢者と中軽度痴呆性高齢者における「固有テンポ」および非固有テンポによる楽曲の聴取時と聴取後の脳波パワースペクトル値の相対比(RRPS)について、重度痴呆性高齢者の「固有テンポ」による民謡「斎太郎節」聴取時に、有意差が認められた(p < 0.001)。すなわち、右頭頂部一後頭部においてα帯域の増加がみられた。一方、中軽度痴呆性高齢者では、「固有テンポ」および非固有テンポによる楽曲聴取時と聴取後に、有意差が認められた(p < 0.05)。すなわち、左右の前頭部・中心部・頭頂部・後頭部の各部位においてθ帯域の増加がみられた。したがって重度痴呆性高齢者に対しては、音楽療法のセッションにおいて「固有テンポ」による提示が効果的であり、中軽度痴呆性高齢者に対しては、音楽療法のセッションにおいて「固有テンポ」による提示が効果的であり、中軽度痴呆性高齢者に対しては、音楽の調整力が重度痴呆性高齢者より残されていることから学習の可能性が示唆された。第Ⅲ部第5章では、痴呆性高齢者に対する音楽療法において、「固有テンポ」を用いた集団セッ

第皿部第5章では、痴呆性高齢者に対する音楽療法において、「固有テンポ」を用いた集団セッションと個人セッションを実施した3事例について検討し、新しい楽曲に対する学習および相互の人間的コミュニケーションの可能性について論じた。

第IV部第6章では、二大痴呆疾患である脳血管性痴呆とアルツハイマー型痴呆の各事例をとおして、ターミナルケアにおける「固有テンポ」による音楽療法の有効性を生理的および行動的に評価した。その結果、生命活動が途絶える死亡直前まで、「固有テンポ」による音楽療法を実施することができ、相互の人間的コミュニケーションが可能であることが示唆された。

第V部第7章では、各章で得られた知見を総括するとともに、本研究の独創性および今後の課題について述べた。本研究の独創性は、筆者がみいだした「固有テンポ」を用いた音楽療法を実施することは、痴呆性高齢者の脳機能に変化を与える可能性があること、および学習能力や相互の人間的コミュニケーションを発展させる可能性があることが示唆されたことである。今後の課題としては、「固有テンポ」と呼吸数や歩行速度との関係、また軽度痴呆性高齢者に対する学習能力や調整力の維持や向上に関する研究が必要であると考えた。

論文審査の結果と要旨

音楽療法が経験的にはなんらかの効用あるいは治療的な効果があることは論を待たないと思われる。しかし、音楽療法についての実証的な研究は、医学、音楽学、心理学、教育学など学際的なアプローチが必要なため、これまで充分になされてきたとはいいがたい状況にある。そういった中で、本論文は音楽療法に関して行動的および生理的な指標を用いて実証的に研究したものである。筆者は音楽療法の専門家であるが、行動的および生理的指標に関する研究法を真摯に学び、それらを自らの実践に適用して、包括的に研究し結実させたものが本論文である。さらに、筆者が長年の音楽療法の実践からみいだした「固有テンポ」の妥当性・有効性について検証性を試みている。

本研究の成果は、重度痴呆性高齢者に対しては、音楽療法にさいして「固有テンポ」による提示が効果的であり、また中軽度痴呆性高齢者については、音楽の調整力が重度痴呆性高齢者より残されていることから学習の可能性があることが示されたことである。さらに、この研究で用いた「固有テンポ」は、人間各人がもっている自発的に発現されるテンポであるため、音楽療法の適用などについて評価する有効な指標になりうることが示唆された。

本論文については、対象とした痴呆性高齢者の例数が多くないこと、「固有テンポ」についての理論的考察の深まりが必ずしも十分ではないことなどが指摘される。しかし、痴呆性高齢者を対象として生理的指標を精密に記録することの困難さを考慮すると一定の成果を得たと考えることができる。また、「固有テンポ」は、従来の精神テンポの概念を発展させたものであり、さらに呼吸数や歩行速度との関連も想定され、きわめて大きな研究テーマで今後の課題ということができる。

したがって、本論文は音楽療法の効果について行動的および生理的な指標を用いて実証的に示したこと、および筆者がみいだした「固有テンポ」の音楽療法への応用および理論的考察は、音楽療法およびその関連領域にたいして学術的に多大の貢献をしたばかりでなく、介護・福祉などの実践にたいしても実証的な基礎的根拠を提供できたと評価することができる。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として合格と認める。